

■松江城下町の空間設計と武家地・町人地の空間について

20140510
島根大学 総合理工学研究科
建築生産設計工学領域
助教 安高尚毅

■全体の流れ

- 1) 都市史研究の新たな視点とその成果
- 2) 堀尾期城下町絵図から把握される空間設計と町人地の構造について
- 4) 松江城下町武家地の空間
- 5) 松江城下町町人地の空間
- 6) 町人地と武家地との比較

■都市史研究の新たな視点とその成果

□都市史研究の新たな視点

- 1) 現代都市の諸問題
- 2) 歴史を活かした町づくり
- 3) 新たな視点

これまでの視点
中世以来の封建社会が生み出した封建都市
身分別居住性の貫徹する都市
軍事機能を最優先とした城郭都市
克服・脱却すべきものとして研究
最新の研究
中世以来の城下町の完成型ではない
現代に繋がる経済社会の成立基盤

日本の近代社会を招来した近代的都市として捉えようとする

※参考文献:宮本雅明著『都市空間の近世史研究』2005

□これまでの都市史研究の成果

- 1) 中世都市の空間と社会（共同性と多元性）
市庭から市町へ
管理交易の港町
小保・尾道・小浜
交易を保証する多様な権力
博多の例
東国の商人司
寺社の庇護の下での「楽」
浄土真宗寺院の境内と門前
徳政免除・諸公事免除の特権
これらの例に領主権力の介入はなかった
- 2) 近世社会を拓いた城下町（多元性の克服）
市町を貫く領主の視線
国人領主・戦国大名の領国単位における公権力の一元化
但し領国市町の一元的掌握はならず
織豊政権の城下町建設

- 安土城下町（1576）
領国市町の一元的掌握を目指す
天守の建設・楽市楽座・身分別性居住
不完全なもので終わる
近江八幡城下町（1585）
在地の市町を城下町に移す
中世都市の解体と再編
博多の太閤町割
京都の都市改造
聚楽第とその周辺の大名屋敷
町場との関係を断ち切るため寺社を移動
寺町を形成
- 3) 城下町建設の意義
城下町の建設を通して公権力の一元化を果たした
織豊系の諸大名により全国で展開
検地により土地の生産力の把握
兵農分離により武士団を在地から切り離す
商農分離により商人・職人を城下へ集住
諸間・諸座を禁じ楽市楽座
→生産・交易の自由を保障
寺院は商人・職人との関係を断ち切られ寺町に集結
商人・職人は一元化を達成した公権力が保障する平和の下、安定した交易と生産の活動を行う条件を獲得
 - 4) 神仏から諸大名＝天下人 神仏から人間へ
日本とヨーロッパの共通性
ヨーロッパルネッサンスの都市計画
イタリア・フェラーラの例（1492）
教会から君主エルコレ1世が中心の都市へ
ルネッサンス都市・建築の理念
調和・比例を通して表現
合理主義と人文主義
人間は理性を持つ生き物
理性に基づき現象をとらえ検討
ルネッサンスの理想都市 パルマノーヴァ
 - 5) 城下町の類型
戦国期城下町、総郭型、内町外町型、町郭外型、開放型
タテ町型とヨコ町型
 - 6) 公権力形成期の城下町（象徴性の成立）
天守から城下町を貫く視線
計画的に設計される
近江八幡（1585）、飛騨高山（1588）、
広島（1589）、萩（1604）、会津若松（1592）
大坂の景観演出（1583～1594）
ヴィスタと櫓屋敷
高札場・ランドマーク・都心

- 求心性を志向する空間
- 6) 公権力確立後の城下町
穏やかな象徴性の演出
江戸と仙台の景観演出
仙台では公権力を象徴する景観はどこにあったのか？
芭蕉の辻
佐藤巧一の回想
西洋都市との比較
パレルモ、トリノ、ローマ
仙台北下町の建設 1601 年
西洋と日本との交流
 - 7) 町人地の空間
公正な市場原理が貫く経済社会が進展
城を必要としない安定した社会と空間が生まれる
大坂の例
アムステルダム
の例
 - 8) まとめ
これまで封建性と階層性の際立つ社会構成、閉塞性と重層性の際立つ空間構成、西洋都市と比べて象徴性に欠ける景観構成によって特徴付けられてきた日本の城下町に対して、近代性と平等性を志向した社会構成、開放性と均質性を志向した空間構成、象徴性を志向した景観構成によって特徴付けられた新たな都市像の一端を提示

■堀尾期城下町絵図から把握される空間設計について

□松江城下町研究の従来の言説

軍事都市 松尾寿氏、山根正明氏の研究

□城下町の基本構成

城＋城下
城下
武家地・町人地・寺社地
松江城下町の城下町形式

町郭外型
ヨコ町＋タテ町型

松江城下町の建設年代
着工 1607 年

□天守の形式

- 1) 望楼型
松江城天守、丸岡城天守、犬山城天守、彦根城天守、姫路城天守、高知城天守
- 2) 層塔形
弘前城天守、松本城天守、備中松山城天守、松山城、宇和島城天守、丸亀城天守

□堀尾期松江城下町の復原

「堀尾期城下町絵図」

堀尾期松江城下町復原図

□何を基準に設計されたのであろうか？

- 1) 松江城下町普請の記述
『松江・亀田山千鳥城取立古説』
「先づ町割先達って仕るべき由に候。末次町より仰せ付けられ候。」
「町屋敷壹番兵庫屋に下され候。」
「茶屋口普請仕り候節より只今の通り仕り候由、大橋掛り候て白湯町割御座候由。」
 - 2) 時系列
城・武家地・町人地の順番
町人地の順番
末次地区から大橋そして白湯地区へ
- #### □町人地における復原図の分析
- 町人地の地名
堀尾期当時の地名は分からず。
『雲陽大数録』（1767～1782）
本町
橋北
紙屋町・末次本町・末次町・苧町・茶町・茶町二町目・中原町・片原町・元材木町・新材木町・末次魚町・鍛冶町・米子町・北堀町
橋南
白湯本町・八軒屋町・和田見町・灘町・寺町・天神町・白湯魚町・堅町・横浜町
- #### □町の形式
- 両側町と片側町
片側町
北堀町・米子町・片原町・中原町／八軒屋町・和田見町
両側町
残りすべて
- #### □町人地の形態
- 1) 町の長さ
統一性なし。
 - 2) 街路と地尻の形態
直線を基本
掘割でない水際が一部曲線になる場合がある
 - 3) 町割の計画寸法
町の長さに統一性は見られないが
奥行には法則性
 - 4) 両側町で相対する敷地の奥行を大きく違えるもの
橋北
末次町・苧町・茶町・茶町二町目・末次本町
橋南
白湯魚町・灘町・横浜町
6～8 間ほどの差となるもの

紙屋町・白潟本町・天神町

□鍵型路の位置

橋北

芋町と茶町の町境、紙屋町、魚町

橋南

白潟本町と天神町の町境、灘町

□平均間口の最も広い町

橋北

末次本町

次に紙屋町

大橋の袂が広く、

これに離れるにつれて狭くなる傾向

末次本町は、勢溜に向けた街路を主街路とし、T字の形状→異例の形態

橋南

灘町

白潟本町・天神町の境界付近に間口の広い敷地

堅町・横浜町は間口奥行ともに大きい傾向

□地割の奥行寸法

奥行寸法は13間とするものが最も多い

12～15間が卓越している

一般的な敷地寸法は間口4間、奥行13間

これは町家の基本的な構成、主屋6間半、渡り廊下2間、湯殿1間、便所1間、蔵2間半の配置である13間と一致を見る。

武家地・寺地に接する北堀町・米子町・中原町・堅町・和田見町が16～21.5間と奥行を長くする。水際に接する宅地は23.5～44間とさらに奥行が長い。

中心的な町である末次本町・紙屋町・白潟本町・天神町及び末次本町に連続する茶町2町目・茶町は16～22間と一般的な敷地よりやや長くする。

□松江城下町の町屋の例

石橋町の町屋

□地割の形態

すべての敷地がほぼ整形の短冊地割

地割の間口は

3間から7間

平均は4.6間

町のあいだでは格差あり

一つの町ではほぼ均質な間口

□地割分析から分かること

各町に均等間口が並ぶこと

各戸に均等な商機会を与えようとした

間口の広い町

末次本町及び紙屋町

末次地区の中心に位置

白潟本町・天神町の境界

白潟地区の中心の場所

これらの町から離れるにつれ小さな間口へ

計画者がそれぞれの地区において中心を創りだすことを志向したと考えられる。

計画性の存在

□何を基準に設計されたのであろうか？

城・内堀の設定

武家地・外堀の設定

京橋川・米子川・北堀→直線上→これが基準となったと考えられる

橋北地区

末次町と片原町を基準として設計

京橋川沿いに街路

街路から町家の収まる最低基準である13間の所に地尻を引く

そこから末次町と芋町では13間の所に街路を通す

さらに大橋川に向けて50間以上の奥行の敷地を配る。

芋町と茶町の境に鍵型を設けたことより、茶町・同2町目・末次本町の北側の短冊地割の奥行が16.5間となる。

橋南地区

松江大橋・天神橋の通りを基準として設計される

□松江城下町に景観演出はあったのであろうか？

1) ヴィスタ

なし

2) 櫓屋敷

あり

江戸の櫓屋敷を考察した玉井氏

都心の角地に三階櫓が建つ

□松江における櫓屋敷の記述

1) 『松江・亀田山千鳥城取立古説』

「前中橋下り口屋敷、武井六左衛門と申す仁屋敷の由、角櫓二階造にて御座候。」

「米子町へ渡り候南橋角屋敷、田中幸兵衛と申す仁屋敷にて御座候。此屋敷角櫓二階造にて候。」

「くづれ橋川向屋敷櫓、古来より御座候。」

2) 『出雲鑑』

「櫓屋敷 老ケ所 西側 櫓ハ三間四面 寛保元酉ノ秋修覆等不被仰付、瓦長屋ニナル、家主薬屋安達氏ト云」(大橋の項)

「四方正面屋敷一ケ処 兵庫屋氏・・・」(大橋の項)

「新材木町西角 往古先国主帯刀公物見ノ楼ト申伝テ、・・・」

□堀尾期松江城下町の景観演出

1) 片側町を景観演出的な視点から設定した

片原町・米子町・北堀町

2) 櫓屋敷の存在

末次本町大橋通り西側に「三間四面の櫓」

新材木町西側の「物見櫓」

城下の橋詰2カ所の「角櫓二階造り」

□中世からの連続性を考える

中世から知られる商人

柴田・鳥谷・森脇・松浦・青戸・伊予屋・持田屋・菊屋

江戸期に白潟本町に居住が見られる者

森脇、伊予屋

タテ町型の町人地に中世からの商人が居住することは興味深い

その後も有力町人として活躍

□町人地の構造について

天保期の町人地

経済的側面にかなった町の計画

□まとめ

堀尾期の計画が松江城下町の骨格を決定づけている

堀尾期町人地の町割

片側町と両側町が存在

街路と地尻は基本的に直線

堀尾期町人地の地割

橋北の間口の広い町

末次本町・紙屋町

橋南の間口の広い町

白潟本町と天神町の町境付近の白潟本町・天神町・灘町の一部のブロック

その他の各町は均等な間口の宅地割を呈する

すべての敷地はほぼ整形な短冊地割で計画

堀尾期の松江城下町計画は、地形的な制限を受けつつも、町人地は外堀を基軸として設定された各地区において中心を創りだすこと志向する計画性が存在した

均等に商機を与えるために均質な間口が設定された

町家の基本構成を考慮した敷地の奥行が設定された

片側町を景観演出的な視点から設定し、櫓屋敷も計画的に配置された

計画的な空間設計と景観演出が行われたことを指摘した

□松江城下町の位置付け

公権力形成期に創られた都市で軍事的な都市と近代社会を招来した近代的都市の両側面を合わせ持った都市と位置づけられる

■松江城下町武家地の空間

有澤権五郎家の例

■松江城下町町人地の空間

寺町・天神町の例

■町人地と武家地との比較

- 1) 空間構成の違い
- 武家地 閉鎖的
- 長屋門と小さな窓・塀・垣
- 町人地 開放的
- 通り庭・ミセ セミパブリックな領域形成
- 格子・蔀戸・障子戸
- 2) 配置形式の違い
- 武家地 主屋を敷地中央に配置
- 町人地 通りに面して主屋を配置
- 3) 建蔽率の違い
- 武家地 45% (有澤家の例)
- 町人地 63% (寺町の一部と天神町の一部を例)
- 4) 庭の違い
- 武家地 建物を囲む庭園
- 町人地 建物に囲まれている坪庭

□地と図の反転した関係

□多様な都市景観

- 1) 武家地
- 閉鎖的な構えの向こうに緑が生い茂っている景観を作り出す
- このような武家屋敷が連続する武家地を近年では庭園都市として捉える見方も提出される
- 2) 町人地
- 緑の存在は奥に隠される
- 開放的ではあるものの通りからは人工物だけの景観を作り出す
- 城下町のひとつの魅力
- 異なる2つの景観が広く展開

□変化に富む景観

この2つの景観を基本としつつ武家地では上級・中級・下級武家屋敷の類型が、町人地では居宅の町家・表長屋・裏長屋の類型が景観に変化を与えていた。

多様な景観が諸要素の複合として醸成され、城下町を魅力あるものとする。